【特別寄稿】

阿蘇の花たち

佐藤達夫

さとう・たつお氏

阿蘇はわが心のふるさとである。

いまでもときどき夢にみる。それは、見わたす限りの緑の起伏と、そのかなたにしずかに立ちのぼる中央火丘の白い噴煙だ。

私は旧制五高に在学していたころ、すっかり阿蘇の大自然のとりこになって、ひまさえあれば、その一帯を歩きまわった。ことに、外輪山につらなる高原の雄大な景観には、ぞくぞくするような感動を覚えた。ときにはテントを張って露営をしたこともあった。秋の夜空に仰いだ満天の星の宝石のような輝きはいまも網膜に残っている。

いちばん忘れられないのは、大分県境に近い波野が原だ。当時はもちろん豊肥線などはなく、熊本からの鉄道は宮地が終点だった。文字どおりのローカル線で立野近くの急坂にさしかかると、乗客が降りて列車のあと押しをする、などという笑い話しもあったくらいである。

宮地で降りて坂梨を過ぎ、外輪山の内壁にかかると、のこぎりの歯のような根子岳の稜線が目の前に鋭く迫った。外輪山を登りつめると、やがて波野が原。そこは久住や祖母の麓にまでつらなるぼう漠たる大野原で、なだらかな起伏が波のようにつづき、そのところどころに湿地などもあって、いつ行っても何かしら季節の花たちが迎えてくれた。

ことに、四月から五月はじめにかけての眺めはすばらしく、ある湿地はサクラソウやフクジュソウの群落で美しくいろどられていた。これらの花は鉢うえではおなじみだったが、その野生を見たのはここがはじめてで、それだけに感激は大きかった。

道ばたにはキスミレが黄金色の花をかがやかせていた。黄色のスミレは、日本アルプスなどの高山にいけばいろいろな種類のものがあるが、低地にはめずらしく、その産地も限られている。それが阿蘇付近にはわりあいに多い。

何年か前、陛下が阿蘇を訪ねられてのお土産ばなしに、ホテルのまわりにキスミレが咲いていたよ、といっておられたが、陛下のお目にとまったのは、キスミレとしても本望ということだろう。

そのほか、波野が原では、アカネスミレ、サクラスミレ、ヒゴスミレなどが目についた。ある年、ここですこし形のかわったスミレを見つけて、牧野富太郎博士に送った。先生から、これは新種だから君の名前をとって、ビオラ・サトウアナという学名で発表しようという返事をいただいたときは、おどり上がって喜んだものだ。

それで、ますます勢いがつき、植物の探索に熱をあげることとなったわけだが学界誌が発行されるたびに、目を皿にしてその発表をさがすけれども、いっこう掲載されない。とうとう待ちくたびれてあきらめてしまった。あとで、仲間の消息通にきくところによると、先生にはそういった空手形を濫発されるクセがあったらしい。しかし、その結末は別として、私の植物熱をあおってくれた波野が原は私の恩人である。

阿蘇の秋もすばらしかった。ここでの名花は、シオンとヒゴタイだ。シオンは、観賞植物とておなじみだが、日本での自生地は、ほとんど阿蘇周辺に限られているといっていい。ススキなどの草むらから高く抜き出て、あの薄紫の花を秋風にそよがせている風情は、阿蘇ならではの眺めだった。

同じキク科のヒゴタイも、シオンと同様、分布上きわめてめずらしい植物だが、ブルーボールの英名のとおり、マリのような碧色の花の玉を花茎のさきにささげている姿は、異国的でさえあった。

そのほか、秋の高原には、アソノコギリソウやホソバノヤマハハコの白い花、ハナカズラ、マツムシソウなどの紫の花が美しく、湿地にはツクシフウロの紅紫の花、サワギキョウの紫の花が咲きみだれていた。

そのころは、一日中高原をさまよっていて、人っ子ひとり見かけないことが多く、身も心も自然の息吹きにひたることができたのだが、それからすでに何十年、はたしてむかしの大自然のたたずまいがそのまま残っているかどうか。

先日、たまたま、「熊本の風土とこころ」シリーズ（熊本日日新聞社）の第一冊「熊本の植物」の寄贈を受けて、むかし懐しい花たちの写真に接し、旧友のおもかげを見る思いがした。これらの花々がいつまでも健在であることを祈る心でいっぱいである。

（人事院総裁）

この人と30分

このコーナーは県出身者で各界のトップとして活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。

積極的に生きよ

大安寺貫主　河野清晃

奈良の〝大安寺〟は東大寺、法隆寺などとともに、南都七大寺の一つ。その大安寺の貫主河野清晃さんは、山鹿市桜町の出身。十一歳で出家、高野山に入り、小学校、中学校、大学、大学院をそこで過ごし、三十三歳のとき大安寺の貫主になった人。

大安寺に河野貫主を訪れたときは、夏の暑い盛りであった。国鉄奈良駅で降りて、案内所で聞くと、駅から南西三キロの大安寺町のはずれの田んぼのなかにあるという。案内通りに行くと、田んぼのなかの森の木立ちに寺屋が見えた。庫裡の玄関に立つと、いきなり現われたのが河野貫主であった。

大安寺は大伽藍をようしていたが、数度の火災に見舞われ、いまは御堂と、宝物殿と新しく建てたれた庫裡だけであった。大きな樹木が昔をわずかにしのばせていた。河野さんは「消極的な生き方はいかん、積極的に生きよ」と言った。たくましい人生観である。

明治四十年生れ、六十六歳

大安寺の由来

大安寺を創建されたのは聖徳太子です。ですからこの寺の歴史は非常に古くて、一三五〇年と言われています。最初からここにあったのではなく、はじめはもっと南の方、つまり現在の明日香村大字小山の大官大寺が平城京の現在地に移建されたのです。大安寺の縁起并流記資財帳によりますと、聖徳太子の病が重くなられたので、推古天皇が、のちに第三十四代舒明天皇となられる田村皇子を太子のもとへ仕わして、「何かご遺言があればお聞きしてくるように」と命ぜられたのですね。太子は天皇のご殊遇に感激され、「皇統の一員に生まれたありがたさに加えて、推古天皇の摂政として二十九年の間政治を摂らせていただき今更何も思い残すことはありません。

ただ、皇子はいずれ天皇の御位に即かれる方だからお頼みがあります。それは私が今小さな熊凝道場という私寺を建立しているのですが、これをぜひ大寺にして欲しいのです。しかし、その目的は私の追善や追福のためではなく、私の一門の繁栄のためでもありません。ただ大寺、つまり官の寺として、国家の繁栄と国民の幸せを祈るためです。」と仰せられました。

その後、熊凝道場が百済大寺という日